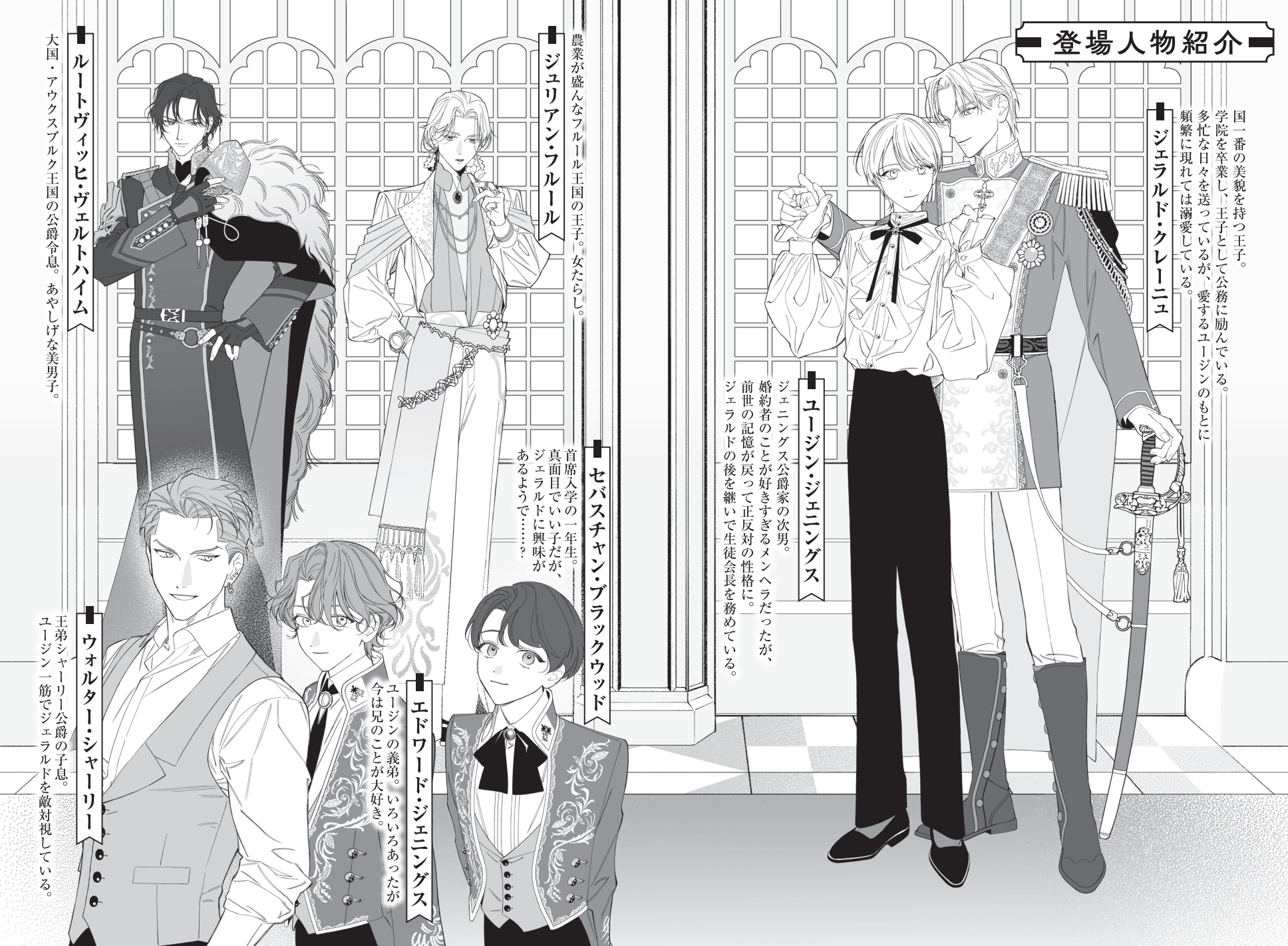
ＢＬゲームのメンヘラ悪役令息に転生したら腹黒ドＳ王子に激重感情を向けられています２

登場人物紹介



ジェラルド・クレーニュ

国一番の美貌を持つ王子。
学院を卒業し、王子として公務に励んでいる。
多忙な日々を送っているが、愛するユージンのもとに
頻繁に現れては溺愛している。

ユージン・ジェニングス

ジェニングス公爵家の次男。
婚約者のことが好きすぎるメンヘラだったが、
前世の記憶が戻って正反対の性格に。
ジェラルドの後を継いで生徒会長を務めている。

ジュリアン・フルール

農業が盛んなフルール王国の王子。女たらし。

セバスチャン・ブラックウッド

首席入学の一年生。
真面目でいい子だが、
ジェラルドに興味が
あるようで……？

エドワード・ジェニングス

ユージンの義弟。いろいろあったが
今は兄のことが大好き。

ルートヴィッヒ・ヴェルトハイム

大国・アウクスブルク王国の公爵令息。あやしげな美男子。

ウォルター・シャーリー

王弟シャーリー公爵の子息。
ユージン一筋でジェラルドを敵対視している。

目次

ＢＬゲームのメンヘラ悪役令息に転生したら　7
腹黒ドＳ王子に激重感情を向けられています２　325
番外編　ごめんねキャンディ

ＢＬゲームのメンヘラ悪役令息に転生したら腹黒ドＳ王子に激重感情を向けられています２

プロローグ

前世で熱中していた十八禁のＢＬゲーム『アルティメット・ラバー』の世界に転生してしまったと気づいてから、あっという間に時間が経った。

メンヘラ悪役令息の俺――ユージン・ジェニングスに用意された破滅ルートを回避して生きていくうちに、俺は婚約者かつ攻略対象の一人であるクレーニュ王国の王子、ジェラルド・クレーニュに本気で恋してしまった。

その上、本来は主人公だったはずのウォルター・シャーリーやジェラルド以外の攻略対象、隣国フルールのジュリアン王子、アウスブルク王国のルートヴィッヒにも好意（？）を寄せられるというカオスな状況になったりもした。

さまざまなトラブルに巻き込まれたり、すれ違ったりしまくった挙句、俺とジェラルドはようやくお互いの気持ちを確かめあい、晴れて両想いとなったのだ。

だがゲームと違って想いが通じあっても物語は終わらない。今や俺にとって現実となったこの世界で、これから先も人生は続いていくのである。

「ふあ……そろそろ寝るか」

寮の自室でベッドライト以外の照明を落とし、横になったそのとき。窓の近くの床が突然、青白く光り始めた。

（まさか、誰か忍び込んできたのか⁉）

俺は素早く上体を起こして身を固くする。瞬間、魔法陣の起動する音が微かに聞こえたかと思うと、一人の男が姿を現した。

「ジェラルド様⁉」

立っていたのは先日、この学院を卒業したばかりの俺の婚約者だ。

「こんばんは、ユージン。どうやら俺のサプライズは成功したようだな」

ジェラルドはびっくりして大声を出した俺に勝ちほこった顔を向け、ベッドのすぐ脇まで颯爽と歩いてくる。

「いつの間に繋げたんですか、この魔法陣」

「さあ、いつだったかな。そんなことは大した問題じゃない。それより俺たちの部屋が繋がっているなんて、最高だろう？　ああ、エディやウォルターには言うなよ。騒がれて面倒なことになるのが目に見える」

そう言うと、ジェラルドは防音魔法を強化した。

「……とりあえず今度からはいらっしゃる前に、ご一報いただけますと助かります」

しかしジェラルドはそれには返事をせず、にっこりと笑う。

「言っておくが、今夜だけじゃないぞ。これからはできるだけ来るつもりだ」
「そんなの……勝手すぎます」
呆れ顔で抗議しても、ジェラルドは目を細めて甘ったるい声を出すだけだ。
「勝手なものか。俺はユージンのことが好きで、いつだって独占したくてたまらない。魔法でも止める術がないくらい、おまえに夢中なんだ」
（なんでこんな恥ずかしいセリフをペラペラ口に出せるんだよ……！　信じらんねえ！）
胸裏で毒づきながらも、頬はじわじわと熱を持つ。
ジェラルドは俯いた俺の手首をぐいと掴むと、ベッドに押し倒した。ベッドライトがふっと消え、あたりは薄闇に包まれる。
真上から俺を見下ろすアクアマリンの瞳は、闇の中で獰猛な肉食獣のように光っていた。
「ジェ、ジェラルド様？」
ジェラルドは俺の呼びかけには何も答えず、ゆっくりと顔を近づけてくる。唇や頬に息がかかるくらいまで距離が縮むと、ぞわりと鳥肌が立った。
「ジェラルド……様、目が……怖い、です……」
「そうか、怖いか……きっと、毎晩おまえのことがほしくてたまらないのに、俺が卒業してから一緒にいる時間が減ったせいかもしれないな」
ジェラルドはくすりと笑いながら右手を俺の手首から離して、頬に指を這わせる。
「そんなの……仕方ないじゃないですか」

視線を逸らそうとすると、すぐに顎を掴まれ、半ば無理やり視線を合わせられる。
「なぜ目を逸らす。逃げたくなったか？　俺から」
答えるより先に、甘い囁きが耳の穴に流しこまれた。
「逃げないよな？　ユージンも俺のことがほしいって目をしている」
「そんなこと、ありません……っ」
「なるほど、無自覚なのか。では教えてやろう」
「な、何を言って……ん……っ」
言いかけた言葉はすべて、ジェラルドの口内に吸いこまれていく。ジェラルドの唇が何度も何度も、触れては離れていくのを繰り返す。
「っ、ジェラルド様……もう……っ」
「だめだ。まだ全然足りない」
「や、ちょっ……ま、んう」
再び重なる唇。角度を変えて、深さを変えて。まるで口内をすべて味わい尽くすかのように、何度となく舌を絡めてくる。
「ジェ、ラルド……さっ、ん、ぅ……や、ほんと、に……も、無理……ぃ」
欲を滾らせた目が、熱っぽく俺を見下ろす。
「ユージンは俺のものだ……絶対に逃がさない。誰にも渡さない……おまえは俺だけのものだ……好きだ、ユージン。愛してる」

再び始まったキスと同時に、ジェラルドはうわごとのように同じ言葉を口にする。
息を吸う間もなく唇をふさがれているうちに、俺の脳内から理性が少しずつ剥がれていくような気がした。
「……や、は、げし……っ」
「激しくしているんだ。俺が隣にいない時間も、自分が誰のものか、一瞬たりとも忘れることのないように……身体に覚えさせてやらないとな」
唇が腫れるほどキスをした後、ぐったりした俺の姿を見てジェラルドは満足そうに笑みを浮かべた。
「さあ、次は……首筋にも胸元にも、おまえのナカにも……すべてに俺のものだと刻んでやる」
やめてくれと言いたいのに、言葉が喉に張りついて出てこない。怖いくらいの執着と独占欲を向けられることに、心の奥底では喜んでいる自分がいた。
（こんなの……無理だ。逃げられるわけがないし……逃げたくない）
魔法よりも強力な愛の呪縛を全身に受けて、俺は目を閉じた。

第一章　忍び寄る影編

「ジェニングス会長、お疲れさまです！」
明るく弾んだ声とともに、ふわふわの黒い巻き毛に緑色の大きな目をした少年が、爽やかな笑顔で入室してくる。
「こんにちは、セバスチャンくん。今日も早いね」
彼は今年の首席入学者であるセバスチャン・ブラックウッド。ゲームの中に出てきた記憶はないが、小動物のような可愛らしい外見の元気で明るい子だ。
首席入学の一年生は必ず生徒会に入るというルールが定められているため、入学と同時に生徒会のメンバーとなったのだ。
前世の学生時代は、生徒会なんてものとは縁がないモブとして生きていたけれど、メンバーが選挙で決められていたのはうっすら記憶に残っている。
俺たちの通う学院の場合は、選挙ではなく前の代の会長が次の生徒会メンバーを指名する。つまり今期の生徒会のメンバーはジェラルドが指名したメンバーで構成されているというわけだ。
ちなみに会長は、今年から三年になった俺。副会長は同じく二年に進級したエディとウォルター。そして首席入学者のセバスチャンという、総勢四名である。

前年度よりも人数が減ったのは、任せられる人材が俺たち以外にいなかったから――ということになっている。だが皆に言わせると、理由は他にあるらしい。
生徒会の新しいメンバーが発表されたとき、ウォルターは呆れたように鼻を鳴らした。
「アイツ、ぜってー自分の知らない奴がユージンに絡むのが嫌で俺ら以外指名しなかったんだぜ。テメエは卒業しちまって、今までみたいに二十四時間体制で監視できねえからだ」
「おいウォルター、何言ってんだよ。さすがにジェラルド様も、そこまで私情を持ち込むなんてことは――」
苦笑いで否定する俺に、エディが虚無顔で言葉を被せてくる。
「するでしょ。だってジェラルド様だよ？」
二人があまりにも断定するので、俺は黙るしかなかった。そんなわけで、とにかく今年は昨年と比べると、だいぶこぢんまりした生徒会になったのだ。
「会長？　どうなさったんですか？」
自分の世界に没入していた俺は、セバスチャンの声で我に返った。
「ごごご、ごめん！　ちょっと考えごとしちゃって」
セバスチャンは心配そうに両眉を下げる。
「そうですか……。会長のお仕事って、びっくりするほどたくさんありますもんね。あまり無理なさらないようにしてください」
「ありがとう。でも大丈夫だよ。皆のおかげですごく助かってるんだ。セバスチャンくんこそ頑張りすぎないようにしてね」
「はい会長。ありがとうございます！」
首席の上に名門ブラックウッド公爵家の令息と聞いたときは、どんな子なんだろうかと少し心配したが、杞憂だった。セバスチャンはとてもいい子だ。
去年、俺をひどい目に遭わせたクレメント・アトリーのように、高位貴族たちは平民を自分たちとは異なる、下等な生き物だと思っている者も多い。だから領民たちが苦しんでいても、知らぬ振りをするのだ。
（交流がないから全然知らなかったけど、ブラックウッド公爵家は、いい人たちなんだろうな）
セバスチャンと他愛ない話をしていると、廊下からバタバタと複数の足音が聞こえてきた。
「悪ぃ、遅くなった！　つかコイツがいつまでもクラスの奴らとくっちゃべってたせいだからな！　俺は悪くねえ」
「ちょっとウォルター、人のせいにしないでよ！　きみこそ脳筋集団と騎士団試験の話で異様に盛りあがってただろ」
いつものように言い合いをしながら、エディとウォルターが生徒会室に駆け込んでくる。コントのような二人のやりとりに、俺とセバスチャンは顔を見合わせて笑った。
この部屋にジェラルドやルーイ、ジュリアンがいないことが、本当はまだ少しだけ寂しい。けれどこうしていると、新しい生徒会も悪くないと思えてくる。
「エディ、ウォルター。そろそろ小競り合いはやめて今日の本題に入らせてくれるか？」

終わる気配のない言い合いをしている二人に声をかけると、きまり悪そうな顔をして小突きあいながら席に着く。
「昨日の夜、ジェラルド様から、ごちそうの日の日程が決まったと連絡があった。来月の十五日、ちょうど週末だから授業に影響もない。今回も僕ら四人、全員参加ってことで大丈夫か？」
三人とも返事の代わりに大きく頷く。
「今回も、料理班と子どもたちと遊ぶ班に分かれる形になるよな」
ウォルターが勢いよくノートを開きながら質問を投げかけた。
「そうだね。メンバー分けはどうしようか？　兄さんは料理班で固定だよね」
「そりゃそうだろ。つーか俺らの中でまともに料理できんの、ユージンしかいねえし」
「そうそう。ウォルターなんてこの前、休みの日にパンケーキを完璧に焼いてみせるって宣言して、自然界では発生しないような、おそろしい色の物体を錬成していたもんね」
思い出し笑いをするエディをウォルターが横目で睨みつける。
「はァ？　人のこと言えんのかよ。テメェだって、この世のものとは思えねえ、激マズのクソみてえなタルトを生み出してただろうが！」
「そうかな。きみのパンケーキよりはマシなできだったと思うけど」
「んなわけねえっつの！　おまえのタルトのほうがクソだったわ！」
「ちょっと二人とも！　言い合いはあとにしてくれ。まあでも、正直言って二人とも料理班には向いてないな。ただ今回は少し凝ったものが作りたいんだ。だからできれば生徒会側でも、もう一人

ぐらいは人手がほしいんだけどなあ」
するとセバスチャンがおずおずと挙手をした。
「あの、会長。よければ僕に料理班のお手伝いをさせていただけませんか？」
ウォルターとエディは揃って目を丸くしている。
「おい、一年坊。マジで言ってんのかよ？　料理ってのはな、ユージンを見てると簡単にできそうに思えるかもしれねえが、経験したことない奴にとっちゃ、かなりハードルが高いぞ」
「そうだよ。料理ってきみが思ってるよりもずっと大変なことなんだよ」
二人の主張はもっともだ。俺は料理にはなるべく魔法を使わないことをモットーにしているから、当然、刃物も使う。だから、下手をしたらケガをする可能性もある。そもそも貴族が自分で料理をすることなんて、まずありえない。
俺は前世では小学校の給食調理員という仕事についていたのだが、その記憶とともにスキルや知識がユージンとしての身体と脳にも継承されていた。
おかげで今は大貴族の子息なのに料理が趣味という、かなりの変わり者として扱われている。ところが、セバスチャンはエディたちの心配をよそに胸を張った。
「大丈夫です！　会長のようにはできませんが、料理に興味が出て、最近は自分でもお菓子を作ったりしているんです」
「えっ⁉　そうなの⁉　それは心強いな。だったらぜひお願いするよ。じゃあ、子どもたちと遊ぶ班はエディとウォルター、料理班は俺とセバスチャンくんで決まりだね」

それから俺たちは、来月のごちそうの日に向けて話し合いを続けたのだった。

ごちそうの日というのは、王立の児童養護施設である陽だまりの家で月に一度行われている、学院の生徒会メンバーによるボランティア活動だ。

この活動は俺が今、もっともやりがいを感じているものの一つである。

学院を卒業したあとはジェラルドとの結婚が待っているわけだが、王子妃になれば公務を割りあてられる。そうすれば、もっと陽だまりの家に関わることができるはずなので、今からワクワクしているのだ。

そもそも陽だまりの家は、ジェラルドが卒業と同時に驚くべきスピードで進めた事業なのである。

三年生が卒業して二ヶ月ほど経った頃。いつもは深夜に訪れるジェラルドが、昼下がりに突然現れた。

週末ということもあり、のんびりと小説を読みながらウトウトしていた俺は、驚いてソファからずり落ちそうになった。

「ジェラルド様！　いきなりいらっしゃるのはやめてくださいって、お願いしているじゃないですか。それにしても、こんな時間においでになるのは珍しいですね。何かあったのですか」

「ユージンにどうしても一番に伝えたいことができたんだ」

「伝えたいこと、ですか？」

首を傾げると、ジェラルドは手にしていた書類の束を俺に差し出す。

それを見た瞬間、俺は驚きのあまり言葉を失った。

「……え、これって……」

――ジェラルド王子提案《児童養護施設　陽だまりの家》王族・貴族会議において提案・可決済み。王都をはじめクレーニュ国内数ヶ所への設立準備完了――

「いつも言っていただろう。親や居場所を失くした子どもたちが、安心してお腹いっぱい食べて眠れる場所を作りたいと」

「言いました。言いましたけど……」

言葉が喉に詰まって出てこない。まさか、こんなに早く形になるなんて。

転生したばかりの頃、俺は自分の人生に立てられた破滅フラグをへし折ることで頭がいっぱいだった。何もなせずに終わってしまった前世のぶんまで、思う存分好きなことをして生きてみたかったから。

けれどジェラルドをはじめ、ゲームのさまざまなキャラクターたちと生身で関わるうちに、いつしか俺の夢は平穏無事な人生を手に入れることから、厳しい環境で生きているすべての子どもが幸せになれる国づくりに関わることに変化していた。

そのことについては、確かにジェラルドにも何度か話をしたことはあったのだが。

「……俺に内緒で、計画を進めてくださっていたのですか？」

「おまえのためだけに動いたわけじゃない。話を聞いて、俺も子どもたちの命を守る事業や政策は、この国に必要だと思った。だから動いただけだ。会議でも大いに評価された。ユージンがいなけれ

ば、気づくことのできない視点からの事業だ。ありがとう」
　正面から隣に移動したジェラルドが、そっと俺の肩を抱く。
「前にユージンが〝あたたかくてほっとできる、陽だまりみたいな場所を作りたい〟って言っていただろう。あのときの言葉を勝手に借りた。文句は……ないよな？」
　俺はゆっくりと首を横に振る。お礼をちゃんと伝えたいのに、唇が小刻みに震えてうまく話せそうにない。それでもなんとか笑みを浮かべてジェラルドを見上げた。
「文句なんて……あるわけがないです。俺の言葉を覚えていてくださったんですね。すごく、嬉しいです……本当に、ありがとう、ございます……っ」
「当然だ。おまえが俺に話してくれた言葉は一言だって忘れない。おまえの願いは俺が隣にいる限り、一つ残らず叶えてやる」
　言葉は偉そうなのに、その声はどこまでも優しい。ふいに目から熱い雫がぽろりと零れ落ちる。ジェラルドはそれを親指で拭うと俺を胸に抱きしめた。
「嬉し涙はこれから、もっともっと流させてやる。ただし泣くのは俺の前でだけにしろ。ユージンの泣き顔は誰にも見せない。俺だけのものだからな」
「ジェラルド様……またそんなことを――」
　抗議の途中で唇をふさがれる。触れるだけの軽いキスを繰り返した後、俺はジェラルドに尋ねた。
「陽だまりの家には、もちろん俺も関わらせてくれるのですよね？　いえ、絶対に手伝わせてください」

　だがジェラルドは頷いてくれなかった。
「気持ちはわかるが……ユージンはまだ学生だ。知ってはいるだろうが、学院の卒業試験は決して簡単なものじゃない。それにおまえは生徒会の活動もあるだろうし、陽だまりの家に関わるのは、卒業してからでも遅くはないと思うが」
「そうかもしれません……でも、きっと今の俺にも何かできることはあります。それに勉強だけじゃなくて、今からもっと社会に貢献したいんです」
　俺の言葉を最後まで聞くと、ジェラルドは腕組みして眉を顰(ひそ)めた。
「考えが甘すぎる」
「え……？」
「おまえの気持ちは理解できる。だが陽だまりの家は国家予算――つまり国民たちの税金を使って動かす事業だ。熱意や想いは確かに大切だが、それだけじゃ成功させることはできない」
「大丈夫です、そのくらい、俺だってわかってます。だからこそ、今の俺にできることだけでも――」
「いや。おまえはまだ現実が見えていない」
　ジェラルドの低い声が割って入る。卒業してまだほんの少ししか経っていないというのに、その顔つきはすでに政治を知る者のそれになっていた。
「この事業にかかる人員、経費、時間……何がどれくらい必要か、想像できるか。もし失敗するようなことになれば、〝子どもたちが可哀想〟だけじゃ済まない。陽だまりの家は一時的なイベントじゃない。継続的に運営していくことが求められる国家事業なんだ」

「そ、それは……そうかもしれないですけど……」
「もちろん俺だってユージンが本気で考えていることはわかっている。だからこそ、卒業してから正式に関わればいいと言っているんだ。それまでの間は、学院で勉強することに集中するべきじゃないのか」
俺は両手の拳を強く握った。ジェラルドの言っていることは正論だ。それはわかっている。けれど、どうしても今やりたいのだ。
「……ジェラルド様のおっしゃることはわかりました。それに……正しいと思います。でも……それでもやっぱり、諦められません。実現可能な案を自分なりに整理してみます。だからせめて一度だけ、俺の考えた計画を、見ていただけないでしょうか」
「……いいだろう。やってみろ。採用するかどうかは、この事業の責任者である俺が決める」
そう言うとジェラルドは部屋から消えた。
人の気配が消えた部屋の中、深く息を吐く。ジェラルドへ挑戦状を叩きつけるような真似をしてしまったせいか、胸がドキドキしている。
(我ながらすごい啖呵を切っちまったな……もう後戻りはできない。全力でやるしかないぞ)
その夜から、俺の本気の挑戦が始まったのだ。
(今の俺にできる範囲のことで、実現可能なこと……)
「熱意や想いだけでは事業は成功できない」というジェラルドの言葉が頭にこびりついて離れない。厳しいけれど正しいその指摘に、悔しさよりも熱が湧きあがった。

〝自分の作る料理で誰かを幸せにしたい〟〝食べることの喜びを感じてもらいたい〟——その想いは、前世から変わらない。だがこの世界でその想いを形にすることを、甘く考えすぎていたのかもしれない。
前世、子どもたちが喜んで給食を食べてくれた笑顔。それはお金にかえられない幸せとやりがいをもたらしてくれた。
(あの笑顔を、この世界でも見たい)
気づけばペンを持った手が動き出していた。何度も書きなおして、ようやく完成したのは一週間後のことだった。
「できた……!」
《ごちそうの日　提案書》
——対象施設：『陽だまりの家』
——提案者：ユージン・ジェニングス
最後に表紙に書きしるして最終確認をすると、封筒に入れて、ジェニングス家の紋章のシーリングスタンプを押す。
久しぶりに使う魔伝書鳩に文書を託して、俺はベッドにダイブした。
この一週間、ほとんど寝ずに提案書について考えていたせいか、途端に瞼が重くなる。
(やれるだけのことはやったよな。あとはジェラルド次第だ……頼む、わかってくれ……!)
遠くなる意識の中で、俺は提案書がジェラルドの心に届いてくれることを祈った。

「……ん？」
浮上した意識とともに、ゆっくりと目を開ける。すでに室内は薄暗くなっている。ほんの少しのつもりが、どうやらだいぶ眠ってしまったみたいだ。起き上がるとソファに人影が見えた。
「ユージン？　起きたか？」
「うわっ！」
座っていたのはジェラルドだった。
「魔伝書鳩、届いたぞ。一瞬、おまえが昔のように情緒不安定になったのかと驚いたぞ」
過去、転生前のユージンが、数時間連絡がなかっただけで、恐ろしいほどの魔伝書鳩を飛ばした事件のことを言っているのだろう。からかうような声音が憎らしい。
「そんなわけないじゃないですか！」
口を尖らせると、ジェラルドが肩を揺らす。
「悪い、冗談だ」
そう言うと立ち上がってベッドの縁に座りなおし、懐から書類を取り出した。それを開いて両手で持つと、俺に見えるようにして掲げる。
「あ、それは――」
俺が書いた提案書だった。
「読ませてもらった。ごちそうの日、見事だった。人員の見込み、必要経費とその捻出方法、開催期間や目的、子どもたちにもたらされる影響まで。提案者の想いが、理論的で計画性のある提案書

の形に昇華されていた」
ジェラルドは提案書をベッドサイドのテーブルにそっと置き、まっすぐに俺を見つめる。
「この提案を採用する。陽だまりの家に、ごちそうの日を導入する許可を正式に出す」
「……本当、ですか？」
提案書を提出してから、数時間しか経っていないはずだ。こんなに早くＯＫがもらえると思っていなかったし、褒めてもらえるとも思っていなかった。
自分の想いが確かにジェラルドに届いたのだと感じ、込みあげてくる嬉しさで胸がいっぱいになっていく。
「疑うのか？　俺の言葉を」
「い、いえ……！　とても嬉しいです！」
ジェラルドは靴と上着を脱ぐと、ベッドに上がり俺の隣に座る。
「ユージンに陽だまりの家のことを伝えたら、手伝いたいと言い出すのはわかりきっていた。もとはおまえの言葉から生まれた事業だしな。だから本当は最初から、ユージンには関わってもらうつもりだったんだ」
「え？　じゃあなぜ……」
見上げると、アクアマリンの目が細められる。ジェラルドは俺の髪を梳（す）くようにして撫でながら、穏やかな声で続けた。
「おまえの本気をあらためて確かめたかった。事業が想いや熱意だけじゃ成り立たないのは事実だ

しな。それにこれから実現に向けて動き始めたら、今はまだ想像できないような課題や問題が起きるだろう。そうなってもこの事業を成功させるという、強い覚悟を見せてほしかったんだ」
「ジェラルド様……本当にありがとうございます」
「礼を言うのは早いぞ。まだ何も始まっていないんだからな。提案が採用された今からが、おまえの本当のスタートだ。夢を形にしてみせろ、ユージン。俺が全力で支えてやる」
ほんの短い間で、精神的にも頼もしさが増したジェラルドの姿に胸がいっぱいになる。口を開けば涙が零れてしまいそうで、俺は黙ったまま小さく頷いた。
それだけですべてが伝わったかのように、ジェラルドは俺を抱き寄せる。
「ごちそうの日を楽しみにしているぞ」
（この人を好きになってよかった）
心の中で呟きながら、俺はジェラルドの肩に甘えるように頭を預けた。

そしてついに、初めてのごちそうの日がやってきた。情けないことに、俺は数日前から眠れなくなるほど緊張していた。
この日のために考案したのは、具だくさんでそれだけでおかずにもなる「ごちそうスープ」。材料費をできるだけ抑え、手間と時間をかけておいしいスープを作ることにしたのだ。
学院の厨房から、ローストチキンのあとにどっさり出る鶏の骨をわけてもらい、事前にチキンストックを作る。それにジェニングス領の農家から格安で手に入れた、売り物にならない形の悪い野菜たちを刻んで入れる。
シンプルな材料と味つけだが、下ごしらえは念入りにしっかり行う。料理ではこの過程をどれだけ丁寧にやるかが、成功のわかれ道になるのだ。
前世で調理師の専門学校に通っていた頃、料亭でアルバイトをしていたのだが、これはそのときの師匠の言葉である。
他にも「安いものにこそ手間をかけろ」「あるものを使ってうまいものを作るのが料理人だ」「珍しいものとうまいものは違う」など、料理に対する考え方の基礎をたくさん教えてもらった。
正直、高級な食材でうまいものを作ることはそんなに難しくない。だからこそ、なんの変哲もない素材や普通は捨ててしまうような部位に手間をかけて、ごちそうに仕上げることに意味がある。
そんなことを考えながら、窓の外を眺めているうちに、陽だまりの家に到着した。
朝の光が差しこむ王都の郊外、なだらかな丘のふもとに建てられた陽だまりの家は、緑の切妻（きりづま）屋根が特徴の二階建ての大きな建物だった。
「わあ！　ねえ見て！　緑の屋根と白い壁のコントラストが可愛い！」
エディが弾んだ声を出す。
「だな。それにでけえ広場も庭もある。いろんな花も咲いてるし……ま、思ったより悪くねえんじゃねーの？」
ジェラルドが作ったのが気に食わないと言っていたが、ウォルターなりの最大限の褒め言葉だろう。

セバスチャンも、にこにこして二人の言葉に頷いている。馬車を降りて建物に近づいていくと、玄関前に緊張した面持ちの職員たちが整列していた。
「ユージン様御一行、お出ましです！」
手前に立つ職員が叫ぶと、扉が開かれる。中に足を踏み入れると、すでにたくさんの子どもが集まっていた。その目は不思議そうに、俺たちに向けられている。
（最初が肝心だ……よし、やるぞ！）
俺は一つ深呼吸をしてから、できるだけ優しい笑顔を作って少し身を屈めた。
「こんにちは。皆、今日は初めてのごちそうの日だね。頑張っておいしいものを作るから、いっぱい食べてくれると嬉しいな」
一拍の間をおいて、可愛らしい返事がたくさん返ってくる。
「うんっ！　やったあ！　ごちそう！」
「おかわり、いっぱいしてもいいのかな!?」
子どもたちが口々にしゃべりだすと、玄関ホールはお祭りのようなにぎやかな雰囲気に包まれる。
エディたち三人は、料理ができるまで子どもたちと遊ぶことになっている。子どもたちと手を繋いで庭へ向かう彼らとは反対に、俺は一人で厨房へ向かった。
厨房には施設の調理スタッフたちが待機していた。俺は入口でエプロンを身につけ、三角巾で髪の毛をまとめてから中へ入る。そうしてスタッフたちに深々と頭を下げた。
「今日一日、お世話になります。ユージン・ジェニングスです。子どもたちのために、安全においしいものを作れるよう、ご協力をよろしくお願いします」
俺が頭を下げたことに驚いたのか、スタッフの慌てた声が響く。
「ユージン様！　どうか頭をお上げください。ジェラルド王子の婚約者であらせられる方が、わたくしどもに頭を下げるなど、そんな――」
俺はゆっくりと頭を上げると、彼の言葉を遮った。
「いいえ。お気持ちはありがたいのですが、今日は学院から生徒の代表として、こちらへ参りました。王子の婚約者としてではありません。ですからお気遣いは不要です。子どもたちのためにおいしい料理を作ることを第一に、コミュニケーションを取りましょう」
場の緊張を和らげるため一人ひとりと目を合わせてゆっくりと言葉を紡ぐ。すると一人のスタッフが、ぎこちない微笑みを返してくれた。
「ユージン様、ありがとうございます……！　子どもたちは皆、今日をとても楽しみにしていたんです」
「……じゃあ絶対に失敗はできませんね。一緒に頑張りましょう！」
俺はエプロンの紐を結びなおして包丁を手に取った。
「さあ、始めましょうか。ごちそうの日が子どもたちの幸せな記憶になるような、とびきりおいしいものを作るんです」
できあがったごちそうスープをワゴンに載せて食堂へ入ると、子どもたちは目を輝かせた。
「わあ！　すっごくいい匂いがする！」

「もうおなかペコペコだよー」
「はやくたべたい！」
配膳中から食堂は大歓声に溢れた。俺とエディ、そしてウォルターとセバスチャンは零さないように注意しながら、子どもたちの前にスープがたっぷり入った深皿を一つずつ置いていく。
他には焼き立てのパン、それにデザートとしてフルーツがぎっしり詰まったゼリーテリーヌも用意した。
「では皆さん、いただきましょう」
院長の声とともに、子どもたちがいっせいにスプーンを手に取る。
「おいしい！」
「おれ、このスープ毎日食べたい！」
「元気が出る味だねえ」
いたるところから聞こえる嬉しそうな子どもたちの声や、夢中でスープを口に運ぶ姿。食堂はまさに陽だまりのような温かさで包まれ、それを見ているだけで胸が熱くなった。
子どもたちが食べ終わった頃に姿を見せたジェラルドが、ごちそうの日を褒めてくれたのも嬉しかった。
（まあ、その後「なぜ俺のぶんを取っておいてないんだ」って拗ねて大変だったけど……）
その夜、ジェラルドは半ば強引に俺の部屋に泊まり、ベッドの上でお仕置きをされるはめになってしまったのだが。

そうして、初めてのごちそうの日は大成功のうちに幕を下ろしたのだった。
その後もごちそうの日はトラブルもなく、無事に回を重ねている。
職員や厨房のスタッフはほとんどが一般市民のため、最初の頃は大貴族の子息である俺たちに緊張した様子だった。が、次第に距離が近づき、最近はかなり自然にコミュニケーションを取れるようになってきた気がする。
調理スタッフとも回を重ねるごとに息が合い、余裕も出てきた。
（だから今回は、ちょっと手間のかかるものに挑戦してみたいんだよなあ）
俺はレシピノートをめくりながら考えを巡らせる。
子どもたちが大好きな味で栄養価が高くて、できるだけ安価なもの。さらに言えば、子どもたちが食べたことがないもののほうが、ワクワク感が増すと思う。
「あ。そうだ……！」
ふと頭の中に、給食の人気メニューでもあったミートソーススパゲッティが思い浮かんだ。
（こっちの世界では、一度も作ったことがなかったな）
この世界では、パンが主食の覇権を握っている。料理によってはライスを食べることもあるが、パスタ類が出てくることはめったにない。
調べてみたが、どうやら貴族だけでなく、庶民の間でもパスタはメジャーではないようだった。
だがエディたちは俺が作るラザニアが大好物だし、食べる機会が少ないだけで、パスタそのもの

はこの世界の人たちの口にも合うのではないだろうか。
「よし、今回はミートソーススパゲッティにするか！」
口に出してみると、これ以上ないほどの名案に思える。
（久しぶりだし、試作してみないと……）
さっそく俺はレシピノートに材料や工程を書き出していった。

一週間後、俺からの呼び出しにジェラルドは上機嫌で部屋に現れた。
「珍しいこともあるものだな。ユージンのほうから誘ってくれるなんて、明日は雪でも降るんじゃないか」
憎まれ口を叩いているくせに、口角は上がっている。本当は嬉しいのにこういう天邪鬼な態度を取るところも、彼を好きになってからは、可愛いと思うようになってしまった。
「すみません、お忙しいところ。実は、次のごちそうの日の料理を試食していただきたいのです」
途端にジェラルドの目が大きく見開かれる。
「試食か……。もしかして、何か変わった料理でも出すつもりなのか」
「変わった料理というか……皆は食べなれていないものだと思うのですが……次のごちそうの日に、スパゲッティを作ろうと思っているんです」
「スパゲッティだと？　小麦粉で作る、あの細長い食べ物のことか」
「はい！」

ジェラルドは難しい顔をして、右手で顎を擦る。
「何度か食べたことがあるぞ。だが正直に言って、あまりうまいものだと思ったことはない……大丈夫なのか？」
そう思うのも無理はない。まだ学院に来る前、俺も一度だけスパゲッティを食べたことがあったが、茹で過ぎたそれにサラダ用のドレッシングがかかっているだけで、お世辞にもうまいとは言えなかった。
どうやらこの世界では、スパゲッティなどのパスタ類を、サラダの素材の一つのように扱っているらしい。
（きっとジェラルドも、俺と同じような経験をしたんだろうな。だとすると、パスタのおいしさや素晴らしさは、言葉で説明しても伝わらない気がする）
「あの、今から試作してみますので、まずは召しあがってみてくださいませんか？　少しここで待っていてくださいね。すぐにお出ししますから！」
ジェラルドは少しの間思案している様子だったが、頷いて席についてくれた。
しかし共用キッチンへ向かおうとすると、立ち上がって素早く俺の手首を掴んだ。
「ジェラルド様？　どうなさったんですか？」
「俺も一緒にキッチンへ行く。久しぶりに料理するおまえが見たい」
「は、はぁ……。別にいいですけど……」
なんだかやけに熱のこもった瞳で見つめられて、ソワソワしてしまう。俺はさりげなく目を逸ら

した。
「じゃあ行きましょうか」
「ああ」
歩き出すとジェラルドはなぜか腰を抱いてくる。正直、歩きにくいことこの上ないのだが、抵抗すると何かとんでもないことが始まってしまいそうな気がしてならない。共用キッチンまでは大した距離でもないし、黙って好きにさせておくことにした。
「では、始めますね」
キッチンの調理台には、すでに材料が並んでいる。スパゲッティは生地から作るので、小麦粉と卵、塩と木製の手回し式パスタマシンも置いてある。
それにミートソースの材料。合いびき肉に薄切りのベーコンを少しだけ加えるのが俺流だ。あとはニンジン、タマネギ、マッシュルームにトマト。野菜はいつも通り、ぜんぶ規格外の不揃いなものを安く譲ってもらった。
（ハーブも欠かせないんだよな）
籠に入っている緑の束を手に取った。中にはバジル、ローズマリー、タイム、ローリエなどがたっぷり入っている。
俺は、調理台を挟んで正面に腰掛けているジェラルドに声をかけた。
「まず、パスタにかけるソースから作っていきますね」
「ずいぶんたくさんの材料を使うんだな」

ジェラルドは不思議そうに調理台の上を眺めている。
「はい。ソースが主役と言っても過言じゃないんです」
話しながら野菜を刻んでいく。すべてを鍋に投入して煮込むと、懐かしいミートソースの匂いがキッチンの中に漂い始める。
「うまそうな匂いだ」
ジェラルドが鼻をひくつかせて呟く。
「これでソースは完成です。一度、火を止めて味をなじませているうちに、スパゲッティを作ります」
小麦粉と卵、水、それに塩を混ぜてひとまとめにしたら、延ばす。それをパスタマシンに入れると、あっという間にスパゲッティが完成した。
次に、大鍋に沸かしておいた塩入りの熱湯の中に、それらを散らすように投入する。
茹で上がったパスタをアルデンテの状態で引き上げ、湯切りして小皿に盛りつける。その上に温めなおしていたミートソースをたっぷりかけてジェラルドの前に置き、隣に腰を下ろす。
「どうぞ、ここで召し上がってください。部屋まで戻ると、その間にスパゲッティが軟らかくなりすぎてしまいそうなので」
「そんなに一刻を争うとは、ずいぶん慌ただしい料理だな」
ジェラルドは美しい所作でフォークにスパゲッティを巻きつけていく。一口食べると目が大きく見開かれた。
「……っ！」

驚いた表情のまま、しばらく咀嚼してから飲み込む。
「なんだ、これは……。俺が以前、食べたものとは別物すぎる……！　うまい。特にこの肉入りのトマトソースが絶品だ」
「本当ですか⁉　よかったぁ」
ジェラルドの反応にホッと安堵の息を吐く。自信作ではあったが、やはり自分以外の誰かに食べてもらわないと不安だったのだ。
「トマトの酸味が抑えられて甘みが強調されているし、子どもたちもきっと好きな味付けだと思う」
ジェラルドはそこでいったん言葉を切ると、難しい顔で腕を組む。
「ただ、気になる点がある」
「気になる点、ですか？　なんでしょう」
うまくいったと思ったのも束の間、予想外の言葉で不安になってしまう。だが、ジェラルドは俺の顔を見て苦笑すると、頭をポンポンと軽く撫でる。
「そんな顔をするな。とてもうまかったと言っただろう」
「でも……気になる点があるということは、何か改善するべきところが見つかったということですよね？」
「ああ。だが料理そのものについてじゃないんだ……子どもたちの中には陽だまりの家に来るまで、ろくにナイフやフォークを使ったことがない者も多いんだ。だからきっと、スパゲッティをフォークに巻いて食べるという動作に苦労するんじゃないかと思ってな」

「あ……っ！」
思わず両手で口を覆う。盲点だった。貧しい暮らしを強いられてきた子どもたちは、貴族の子どもと違って、自分用のカトラリーや食器を持っていないことが多い。
「器用な子どもたちはすぐにうまく使えるようになるが、苦戦している子も少なくない。味は間違いなく素晴らしいが、スパゲッティを食べることは、子どもたちにとって少しハードルが高いかもしれないな」
「……ジェラルド様のおっしゃる通りです。俺、いつの間にかおいしくて珍しい料理を作ることばかりに目が向いて、肝心なことが頭からすっぽり抜けていました。どんなにおいしいものを作っても、子どもたちが楽しく食べてくれなければ、意味がないですから」
（クソ……気づかないうちに貴族の暮らしに慣れきって、基本的なことを見落としていたんだ）
情けなくなって俯くと、ジェラルドの大きな両手が頬を優しく包み込む。彼は少し屈んで俺と視線を合わせて優しく微笑んだ。
「落ちこむことはないさ。改善点があるかどうかを検証する――そのための試食だったのだろう？」
「はい……！」
ジェラルドの言う通りだ。次のごちそうの日まではまだ時間がある。新たにイチからメニューを考えなおすか、ミートソースを活かして改善するか。それを検討する時間は十分にある。
「ありがとうございます、ジェラルド様。俺、今からもう一度、考えてみます！」
そうと決まればすぐに始めたい。だが立ち上がろうとした瞬間、頬に触れていたジェラルドの手

が腰に回り、強く引き寄せられる。
「どうなさったのですか……？」
首を傾げると、ジェラルドの指先が頬から耳へと動き、俺の髪を右耳にかけた。
「まだだ、ユージン。俺の試食はまだ終わっていない」
「……はい？」
意味がわからず戸惑う俺を、ジェラルドはさらに強く引き寄せる。
「デザートをまだ食べていないと言っている。今日は、とびきり甘くて、蕩けるようなものがほしい」
耳元で囁かれて背筋がぞわりと震える。
「す、すみません……今日は食後には何も用意していなくて」
「用意なら俺がするから問題ない」
熱を帯びたアクアマリンの瞳が俺をじっと見つめ、腰に回っていた手がさらに下りていく。
「ちょっ……！　ジェラルド様……！」
「なんだ」
「こ、ここは共用のキッチンですよっ！　も、もし誰か来たらどうするんですか⁉」
焦る俺にジェラルドは片眉を上げて不敵に笑う。
「防音魔法だけじゃなく、入室結界も張った。つまり……」
言いながら俺の首筋にキスを落とす。
「今から誰にも邪魔されずに、ここでユージンというデザートをいただけるということだ」

呆然とする俺をよそに、ジェラルドは使用していない調理台の上に俺を座らせ、正面に立った。
いつの間にか彼の手に握られていたものに気がついた俺は、思わず叫んだ。
「それ……俺の部屋にしまっていたチョコレートソースじゃないですか……っ！」
ジェラルドは口の片端を上げて、ボトルを俺の眼前で軽く左右に揺らしてみせる。
「俺のデザートに使うトッピングだよ。うまそうだろう？」
「な、何を考えて……っ！」
俺が身を捩るよりジェラルドのほうが素早かった。とろりとしたチョコレートソースがシャツの襟元から滑り落ち、鎖骨のあたりから胸元、腹部へと伝っていく。
「あ……っ、や、だめ、こんなとこで……っ！」
ジェラルドは俺の抵抗を無視して、シャツのボタンを丁寧に外すと、シャツを左右に広げた。晒された胸元の二つの飾りは、すでにぷっくりと浮きあがっている。
「ユージンのチェリーはもう食べ頃になっているじゃないか。まだ触れてもないのに、こんなに真っ赤に熟れて膨らんでいる」
ジェラルドは独り言のように呟きながら、先端へたっぷりとチョコレートソースを塗りつける。そして美しい顔を寄せて、ぴちゃぴちゃと卑猥な音を立てて舐め取っていく。
「……え、ぁ……っ、う、ちょ……ま……やぁ……」
広いキッチンに俺の甘く媚びるような嬌声が響き渡り、腰がびくんびくんと戦慄く。こんな場所でこんなことをされるなんて、恥ずかしくてたまらない。だがそれと同じくらい自分が興奮してい

ることも自覚していた。
強く拘束されているわけでもないから、逃げようとすればきっと可能だ。それにジェラルドだって本気で俺が嫌がったら、やめてくれるだろう。
口では拒絶するようなことを言っているくせに、俺はこの先を期待してしまっているのだ。
ジェラルドは俺の腰をさらに強く抱くと、満足そうな笑みを浮かべる。
「ああ、声までいつもより甘くなっている気がするな。仕事熱心なユージンも魅力的だが、俺のことを忘れられては困る。最近は、ほとんど触れることもできていなかったしな」
言い終わると再び肌に舌を這わせてきた。今度はただ舐めるのではなく、甘噛みしたかと思えば、突然強く吸ったり、強弱をつけたりして愛撫する。
まるで自分が本当にデザートになって、ジェラルドに食べられているような気分だ。
「……っ、こんなこと、しなくても……や、あっ……忘れま、せん……っ」
「どうだか。ユージンはすぐに俺以外のことに関心を向けてしまうからな。俺ばかりがおまえをほしがっているんじゃないかと不安になるんだ。だから今日はおまえの声がもっと甘く蕩けて、自分から俺をほしがるまで……離さない」
「や、だめ……っ、レシピ、かんがえなおさな……や、ぁ……っ！」
ジェラルドの舌は熱く、触れられるだけで何も考えられなくなってしまうほど気持ちいい。
「だ、だめ……レ、レシピが……っ！」
「そんなに蕩けた顔で言っても、説得力がない」

「やッ！　だめッ！」
ぼんやりしているうちに、ボトムスが下着ごと両脚から抜かれてしまう。いつもは下着の上からの愛撫も楽しむのに、今日は余裕がないらしい。
「だめだと言いながら、準備は万全じゃないか」
すでに濡れた秘所にジェラルドの指が触れる。少し力を入れて後孔を押されただけで、背筋がビリビリと痺れるような快感が全身を突きぬけた。
「や、やあっ！」
俺の反応に、ジェラルドはわざとらしく驚いたふりをする。
「おい、ほんの少し触れただけだぞ？　やっぱりユージンは恥ずかしいことをされるのが好きなんだな」
「んッ……や、ちが……っ」
恥ずかしくて目に涙が滲んでくる。それを見たジェラルドの目に嗜虐的な火が灯った。
心とは裏腹に後孔はさらに濡れそぼっている。俺のモノはすっかり勃起して、先走りが次々と垂れていく。
「触れてもいないのに、こんなに溢れて……まるで早く触れてくれと泣いているみたいだ」
ジェラルドは俺のモノをじっと見つめながら小さく笑う。その声は興奮で掠れていた。ただ見られているだけだというのに、俺のモノは嬉しそうにビクビクと震えてしまう。
（ああ、もう逃げられない……）

次の瞬間、ジェラルドは調理台に置いていたチョコレートソースを手に取ると、俺のモノにかけていく。
「あ……だめ……そんな、こと……」
あたりに再び甘い匂いが漂う。
「ユージン、もう我慢できない」
ジェラルドは勢いよく俺の股ぐらに高い鼻を突っこむと、舌を出して見せつけるようにしながらチョコレートを舐めとっていく。
「あっ……やだ、そんな、舐め、ないっ、で……っ」
チョコがすっかりなくなると、今度は先端めがけてチョコレートソースをぶっかけ、じゅぽじゅぽと力強く吸引するようにして愛撫する。
「あ、ああ……っ！　だめ、やだ……あっ！　うそ……っ！」
気づけばもう片方の手は円を描くようにして秘所を撫でまわしている。すでに愛液で濡れたそこは、触れるだけでくちゅくちゅと淫靡な水音を立てる。
「だ……め……恥ずかし……からぁ」
そんなことを言いながらも、腰が上下に揺れてしまう。それを見たジェラルドの目が意地悪く光った。
「何がだめなんだ？　恥ずかしいのが好きなくせに。前も後ろもびしょ濡れだぞ。こんなに興奮して……濡れ方がいつもよりすごいんじゃないか」

「あ、ちが……や……っ」
言葉でいじめられるだけでも、気持ちよくなってしまう。ジェラルドは手を止めることなく俺の耳元に唇を寄せ、意地悪く囁く。
「おいユージン、ここをどこだと思ってるんだ？　ん？　学生寮の共用キッチンだぞ。そんなところで、おまえは裸になって……俺に触れられ、気持ちいいと鳴いているんだ。本当に淫乱で……可愛くてしかたない」
「あ、やだ……そんな……言わな……でぇ」
「ほら、また。嫌だと言いながら、嬉しそうにビクビクしてる」
ジェラルドの大きな舌が裏筋をベロリと舐める。それから俺の両膝の裏側に手を差しこむと、大きく脚を開いてぐっと持ちあげた。
「こんな格好……やだ……」
ジェラルドの眼前に自分の恥ずかしいところが全部晒されるような格好にされて、身体中が燃えるように熱くなる。
「安心しろ。絶景だ」
ねっとりした声で満足そうに宣言すると、ジェラルドは再びチョコレートソースを手に取って、後孔に塗りたくる。
「本当に……今日のデザートは最高だな」
独り言のように呟くと同時に、熱い舌が秘所を這う。生温かくぬるりとした舌は、まるで生き物

のように動く。
「ひゃ、ああんっ！　あああっ！」
快感を逃したくて腰が勝手に浮きあがり、太ももが痙攣するように震える。ジェラルドは指で秘所を左右に広げると、まわりの皺を一つひとつ伸ばすようにしてじっくりと舐めた。
「あ――ッ！　あ……や、あ」
おかしくなりそうなほど気持ちいい。目線を下げると、脚の間でジェラルドの銀髪が揺れている。その卑猥な光景がさらに羞恥と興奮を煽り、快感を高めていく。
ふやけてしまうんじゃないかと思うほど舐められた後、今度は柔らかく解れた孔の中に、舌が侵入してくる。
「あっ、あっ、ああ――っ！　んっ、それ、だめっ……だめ――ッ！」
浅いところで舌を抜き差しされると、それに合わせるかのように腰が上下する。無意識に逃げそうになる俺の下半身をジェラルドはがっちりと押さえ込むと、さらに激しく抽挿を繰り返す。
「あっ……はぁっ、はぁっ……」
やがてジェラルドは肩で息をする俺のナカから舌を抜き、濡れた口元を手の甲で拭った。それからぐったりしている俺を抱き起こすと、脇の下と膝裏に腕を差し込んで姫抱きにする。
「……続きはベッドの上だ」
耳元で囁いたと思うと、次の瞬間には部屋のベッドに仰向けに押し倒されていた。
覆いかぶさるようにして俺を抱きしめながら、ジェラルドは顔中にキスの雨を降らせる。額、鼻先、瞼、頬、こめかみ……そして唇。
触れる唇が気持ちいい。ジェラルドの思いが伝わってくるような優しいキスに、胸の中が多幸感でいっぱいになっていく。
「ユージン、ユージン……っ！」
キスの合間に何度も俺の名前を呼ぶジェラルドの声は低く甘く、それだけで腰が疼き始めてしまう。
「なあユージン、早くおまえのナカに入りたい。ずっと我慢していたんだ」
しばらくキスを交わした後、ジェラルドは苦しげに呻いた。アクアマリンの瞳は瞳孔が開ききって、ギラギラと燃えている。
怖いくらいに求められていることが伝わってきて、ゾクゾクする。返事の代わりに小さく頷くと、ジェラルドは素早く衣服を脱ぎすてた。
久しぶりに見る均整のとれた美しい身体から目が離せない。今からこの逞しい腕に抱かれるのかと思うと、期待で胸が震えてしまう。
（こんなに興奮するなんて……俺はジェラルドの言う通り、淫乱なのかもしれない）
「……入れるぞユージン。奥深くまで、俺を受け入れてくれ」
「あ、まっ……ジェラルド……様ぁっ！」
言うが早いか、ジェラルドの雄芯が秘所をこじ開けて入ってくる。大きな質量でナカが埋めつくされると、呼吸が苦しい。

「は……っ、ふぅ……っ、苦し……っ」
「……っ、クソ、久しぶりだから……きついな」
ジェラルドも眉間に皺を寄せて顔を歪めている。さっきまではあんなにギラついていたのに、己の欲望に任せて好き勝手にするようなことはせず、なじむまで動かずにじっとしてくれていた。
「ユージン、大丈夫か？　まだ苦しいか？」
俺を優しく抱きしめ、唇にそっとキスを落とす。
今すぐ動きたいだろうに、いつも俺の身体を気遣ってくれる。その優しさに涙が出そうだ。
「ん……も、平気……です」
「本当に？」
「は、い……っ」
「じゃあ……少し動くぞ」
ジェラルドが少し腰を引き、再び雄芯を俺のナカに押しこむ。その瞬間、頭の中が真っ白になった。
「あ……っ、ああ――っ!!　す、すご……っ」
背中が勝手に反り返り、瞼の裏で火花がスパークする。
「ユージン、気持ちいいのか？　いいんだよな？」
確認するように聞いてくるジェラルドに、俺は激しく首を振った。気持ちいいなんてもんじゃない。脳みそも身体も、バターのようにドロドロに溶けてしまいそうだ。
「あっ、あっ……いい、きもち、いい――――っ！」

俺は淫らな嬌声を上げ、ジェラルドの背中に両腕を回してしがみつく。それに応えるように、ジェラルドはベッドが壊れてしまいそうなほど激しい律動を始めた。
「ぐ……っ、ユージン、そんなに……締めつけ……るな……ッ」
ジェラルドが歯を食いしばって呟く。顔は歪み、額には汗が滲んでいる。鋭利な輪郭を伝って、透明な雫が顎から俺の胸元にいくつも落ちた。
「あっ、あっ、ああ――っ！　も、だめ、いく、いっちゃう……っ」
暴力的なまでの快楽に揺さぶられ、気持ちいいということしか、もうわからない。俺はまた吐精して、泣いているような嬌声を上げながら嵐のような快楽の波に流されていく。
ジェラルドも荒い息を吐きながら、ひたすらに腰を振っている。顔は熱に浮かされたように赤く、額には血管が浮き出ている。快楽に耐えるジェラルドは、激しく怒っているようにも見えた。
「ユージン、出すぞ……っ！　俺のすべてを受けとめてくれ……ッ！」
ジェラルドは苦しげに呟きながら、俺を強く抱きしめる。まるで俺を自分の中に取りこもうとするかのように強く胸に抱いて、頂点に向かって律動を激しくしていく。
「あ、あ……っ、すご……っ、またいく……いくいく……ッ!!」
「ユージンっ！　ユージンッ!!　好きだ、ユージンッ!!」
ジェラルドが叫ぶと同時に、俺のナカではちきれんばかりに質量を増していた雄芯が、ぶるりと大きく痙攣する。同時にジェラルドの腕に力が入り、窒息しそうなほど抱きしめられた。
ドクドクと熱いものが最奥に注がれ、俺は全身でジェラルドを感じる。

「っ、はあっ、はあっ……」
すべてを出しきったジェラルドは、肩で息をしながらしばらく俺の上にのしかかっていたが、やがてごろりと隣に転がった。
「おいで、ユージン」
そう言うと、こっちを向いて両腕を広げる。俺は返事の代わりに腕の中に飛び込んだ。ジェラルドも俺も汗びっしょりで、ぬるぬるしている。それでも俺を抱きしめて離さない。
(さすがに身体を拭くぐらいはしてから寝たいんだよなあ)
まるで俺の思考を読んだかのようなタイミングで、ジェラルドが呟く。
「……このまま寝ると風邪を引きそうだ。シャワーを浴びたほうがいいな」
「はい、そうしましょう」
ジェラルドは元気よく起き上がると、俺を姫抱きにしてバスルームへ歩き出す。
「ちょ、降ろしてください！　歩けますってば」
「いいから大人しくしてろ。ジタバタすると落ちるぞ」
落とされるのは勘弁だ。俺は慌てて首に両腕を回してしがみついた。代わりに言葉で抗議しても、笑うばかりで取りあってくれない。結局シャワーブースまで入ってから、やっと降ろしてくれた。
文句を言う間もなく、頭から心地よい温度のお湯が降ってくる。
(うわ、めっちゃ気持ちいい……)
思わず目を閉じると、頭上からからかうような声が聞こえる。

「ついさっきまで文句を言っていたのに、急に大人しくなったな」
目を開けると、ジェラルドがにやにやと笑っている。俺はわざと聞こえないふりをして、ブースに備え付けられた大理石の棚に手を伸ばした。
だがその手はジェラルドに阻まれる。
「すみません、シャワージェルを取りたいので、離していただけますか？」
「必要ない。俺が洗う」
「はい!?」
ジェラルドは驚いて固まる俺を後目にボトルを手に取ると、壁に掛けてあったボディ用のネットに素早く広げて泡立てる。
そうしてホイップクリームのような泡を作ると、背後に回って俺の右腕に泡を乗せて、滑らせるように塗布していく。
(やば……なんかこれ、すごく恥ずかしくないか!?)
腕の次、鎖骨から胸元へと滑っていく両手を押さえようと試みるも、華麗にかわされてしまう。
「あ、あの。自分でやるので、もうそれくらいでだいじょう――ひゃっ！」
ジェラルドの指先が胸の尖りに触れた。
「さっき、ここにたっぷりチョコレートソースを付けてしまったからな。おまえのためにも、念入りに洗う必要があるだろう？」
(跡形もなくなるほど舐めとったくせに何言ってんだよ)

立ち読みサンプル
はここまで

抗議の意味で軽く睨む。けれどジェラルドはそれを無視して、胸元へ手を伸ばす。そして泡をたっぷり付けた乳首の先端を人差し指と中指で上から撫でたり、摘まんだりして洗い始めた。
「あ、ちょ、ま……っ、ああっ」
膝下がガクガク震えてくる。快感を少しでも逃そうと前屈みになると、ジェラルドは先端を摘む指先に力を入れた。
「や、やめっ！」
「こら。そんなに前屈みになったら、うまく洗えないだろう」
「だ、だから自分で――っ、あ、あっ、ああ……っ！」
自分で洗うことは許さないと言わんばかりに、一定のリズムできゅっと先端を摘まれる。そのたびに嬌声を上げてしまうのが情けない。
俺が大人しくなると、ジェラルドの手は胸から腰、下腹部へと下りていく。けれど、もうすでに半勃ちになっている俺のモノには触れず、今度は背中を泡で撫でていく。
寂しいようなホッとしたような気持ちでいると、ジェラルドの手が尻の割れ目に辿り着く。
「あ、まってっ！」
「ここもしっかり洗わないと。遠慮するな」
耳元で囁かれて、身体が甘く痺れて鳥肌が立つ。手は割れ目の先へと進み、まだ柔らかく解れている後孔に辿り着く。
泡だらけの不埒な手は、孔の周囲を何度か撫でると、ナカに入ってくる。

「ジェラルド様……っ！　洗うだけって、言って――」
「洗っているだろう？　さんざんいじめてしまったんだから、優しく洗ってやらないと」
言いながら指を入れて、ナカをかき回すように触れていく。浅いところを刺激され続けていると、徐々にもの足りなくなってしまう。
ジェラルドはそれを見透かしたかのように小さく笑った。
「おいユージン。どうした、腰が揺れているようだが」
「ジェラルド様が、変なとこ、触る……っから……ぁっ、あ、ん……」
「……なあ、もっと奥まで触れてほしいか」
誘惑するような甘い声に、脳が溶けていく。ジェラルドは再び硬さを取り戻した自分の雄芯を、尻にわざとらしく擦りつけてくる。
静まったはずの火が再び身体中に灯り、俺は正気を失った。
「さわ、って……ほし……っ」
「まだだめだ。先にこっちを可愛がってあげないと、可哀想だろう？」
自分から「触れてほしいか」と聞いてきたくせに、ジェラルドは意地悪く笑いながら孔から指を抜いた。そして、ひどいありさまになっている俺のモノを握りこむ。
「ん、あ、アッ、だめ、ああっ！」
腹につくくらい反り返り、恥ずかしくなるぐらい大量の先走りと泡に塗れてぐしょぐしょになっているそこは、少し触れられただけで絶頂寸前まで高まってしまう。